

青葉の下

小川未明

青空文庫

とうげうえ、おおきな桜の木がありました。春になると花がさいて、とおくから見るとかすみのかかったようです。その下に、小さなかけ茶屋があつて、人のいいおばあさんが、ひとり店先にすわつて、わらじや、お菓子や、みかんなどを売つていました。

荷を負つて、峠を越す村人は、よくこのこしかけに休んで、お茶をのんだりたばこをすつたりしていました。

賢吉と、とし子と、正二は、いきをせいて、学校からかえりに坂を登つてくると「おばあさん、水を一ぱいおくれ。」といつて、飛びこむのでした。

「おお、あつかつたろう。さあ、いまくんできたばかりだから、たんとおむがいい。」とおばあさんは、コップを出してくれました。おばあさんは、峠の下から、二つのおけに清水をくんで、天びんぼうでかついで上げたところでした。

ところが、自動車じどうしゃが、こんどあちらの村まで通ることになつて、道がひろがるのでありました。それで、桜の木をきろうという話はなしが起こつたのです。それに、ほんたいしたのは、もとよりおばあさんでした。つきには、この茶屋ちややに休んで、花をながめたり、涼すずんだりした村の人たちです。それから、賢吉や、とし子や、正二などの子供たちでした。

「あの桜の木をきつては、かわいそうだ。春になつても、花が見られないし、夏になつても、せみがとれないものなあ！」と、たがいに話し合いました。子供たちの不平が耳に入ると、親たちも、いつかきることには、ほんたいしました。それで村の人々が桜の木を道のそばへうつすことになつたのです。おおぜいの力ですると、どんなことでもされるものです。大きな桜の木は、じやまにならぬところへうつされて、おばあさんの茶店は、やはりその木の下にたてられました。

「おばあさん、今年は、花がさかないのう。」

「そうとも、人間でいえば、大病人だぞ。かれなければいいが。」と、おばあさんは、しんぱいしました。天気がつづくとおばあさんは、下から水をくみ上げて、根もとへかけてやりました。

「おばあさん、僕がくんできてやるから。」

ある日、学校の帰りに賢吉は、すぐはだしになつて、バケツを下げて、峠をかけ下りました。それから、とし子も、正二も、村の子供たちは、学校の帰りに、水をくんで、桜の木の根にかけてやるのを日課としたのです。どうでしょう。木は、ふたたび昔の元気をとりもどしました。いま、大きな枝には青葉がふさふさとして、銀色にかがや

ています。

「みんなのおかげでな、この木も助かつたぞ。」と、おばあさんは、こしかけている村の子供たちの顔をながめて、さも、うれしそうでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「せうがく三年生」

1938（昭和13）年5月

※表題は底本では、「青葉《あおば》の下《した》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青葉の下

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>